

令和 3 年 9 月 定例会 一般質問

通告 4

質問 北根室ランチウェイ（通称 KIRAWAY）の復活について

答弁 一部運用できるルートを手頃に使いながら存続に向けた協議を進めてまいります

18 番 松村 康弘 議員

【質問：松村 康弘 議員】

18 番、松村康弘でございます。北根室ランチウェイ、通称 KIRAWAY の復活についてお尋ねいたします。

新型コロナウイルスの蔓延、度重なる緊急事態宣言の中、県境をまたいで移動を止められているにもかかわらず、町内を走る本州ナンバー、レンタカーを見るにつけ、北海道の自然にあこがれ行ってみようという気持ちには共感いたすところがございます。



この場面で開陽台の心の碑に記された、中野英輔氏の手紙の冒頭、現代の人間には真に自然が必要ですよという言葉が浮かんでまいります。

以前からも主張してまいりましたが、コンクリートジャングルに住み自然に余り接する機会のない都会人にとって、北海道はあこがれの地であることは間違いございません。まして、このコロナ禍に立ち塞がる閉塞感を打破するためには、自然の中に身を置くことが人間にとっていかに重要なことかを痛感する次第でございます。

北海道の大地に足を下ろし、時を過ごし、自らの足で歩く、そして根を張っていく。

私ごとではございますが、大病の手術後、毎日 10 km を目標に、よほど天気の悪い日以外は農道を歩いております。季節の移ろいの中で、その 2 時間余りの時間は私にとって至福のひと時であり、風のそよぎ、鳥のさえずり、虫のささやき、雨上がりのぬかみさえ大地の上を自分の足で歩いていることと、自らの生命の躍動と共振を感じ、同時に想像力を羽ばたかせ思索の時間でもございます。

さて、今般、「歩・Walking」という小冊子に出会いました。K I R A W A Y 北根室ランチウェイの創始者である佐伯雅視氏の手になる K I R A W A Y の 15 年の歴史が記されています。その末尾の年表にはスタートから閉鎖に至る経過が記されています。御本人からの聞き取りを加え御紹介いたしますと、2005 年 10 月、モアン山周辺・開陽台～牧舎間ルート探索。2006 年、中標津に歩く道をつくる会設立から北根室ランチウェイ通

称K I R A W A Yと名付け活動を開始。2011 年、全面開通を機に日本ロングトレイル協議会に加盟。年間 3000 人のハイカーが訪れ、日本のロングトレイルで行ってみたいとトレイルの上位になる。2018 年 12 月、会員の高齢化に伴い、このままの存続は無理と考え 3 年の準備期間を設け、K I R A W A Y存続に向けグリーンツーリズム推進協議会発足、中標津町、中標津町観光協会、空港ビルなんかが参加しております。存続への協議が開始されました。2019 年 4 月、酪農家からのハイカーの増加に伴う諸問題が表面化し、酪農家の敷地を通るルートを廃止し、格子状防風林ルートに変更。2020 年 4 月、K I R A W A Yは本州方面からのハイカーが多いため、新型コロナウイルス蔓延防止とコロナ禍の影響を考慮し当面通行閉鎖を決定。同年 10 月、体力の限界、永続可能な資金難を見越して、ランチウェイの全面的閉鎖を決断。

その昔、開陽台から見はるかす東側の台地が企業に買収され、温泉付き住宅地として分譲されようとしていました。開陽台からの惑星・地球を想起させるような雄大な景観に対して、中標津町には「観光資源なんて何もない。」「お金になるのはそれでいいじゃないか。」という声がある一方、それに対抗して、「開陽台からの景観は文化です。」という住民運動も巻き起こり、紆余曲折を経て 200 町歩の土地は今日町の所有となり、景観条例も制定されて今日に至っています。

私はその時以来、我が地域は基幹産業である農業の発展とともに形成された景観の中にあり、それは言い換えると生命の産業の場であり、人々の命をあがなう食料生産の場を農業自由化経済構造から防衛する必要があるということ、中標津町の景勝地である開陽台、モアン山周辺の観光、なかんずく大地に足を下ろし、長い時間をこの地に滞在すること、歩いて中標津を探索する体験観光は、深くこの地を知ってもらうこととなるための有効なツールになりうるようになるようになりました。そして私自身は、長期滞在型の宿泊施設を建設運営するようになるんですが、佐伯氏も仲間を募り、歩く旅のできる北根ランチウェイを模索し実際に運営されました。

このことは、地域の産業、特に酪農を守ることと、酪農文化の啓蒙活動を推し進め都市と地方の融合、すなわち歩く旅の楽しさを知ってもらい食糧生産現場を消費者に理解してもらい、極めてタイムリーな、そして中標津になくてもならない試みであったと高く評価し、深く敬意を表するものでございます。

しかるに、その道は今日、閉鎖されたままになっています。町長はこのK I R A W A Y・北根室ランチウェイの価値をどのようにお考えになりますでしょうか。コロナ禍を乗り越えた後において、この道の復活に向けた試み、そして、アウトドアに特化した観光の推進に向けた試みを強く主導されるべきと考えますが、よろしく御答弁お願いいた

します。

【答弁：町長】

松村議員御質問の北根室ランチウェイの復活について御答弁申し上げます。

新型コロナウイルス感染症の流行によって観光需要は大幅に減少し、旅行業・宿泊業はもとより、地域の交通や飲食業など多くの観光産業においても深刻な状況が続いています。

そのよう中で、国はG o T oトラベルなど観光産業の回復に向けた支援とともに、地方の自然や食・文化・歴史などを活かした、安全で快適な観光需要の喚起に力を入れております。

本町においても、アフターコロナに向けた観光振興策として観光協会と連携し、自然環境を活かしたキャンプやアウトドア体験の推進、観光施設などの受け入れ環境の整備、空港利用促進期成会と連携した中標津空港圏域のプロモーション事業に取り組んでいるところでございます。

北根室ランチウェイについては、議員から御説明があったとおり、酪農家である佐伯氏が数人の仲間とともに作り上げた全長が71.4kmにも及ぶロングトレイルコースであり、国内最大級の大規模酪農地帯を貫くコースでございます。

佐伯氏が執筆された「歩・Walking」という冊子に書かれているとおり、この北根室ランチウェイには長い歴史があり、中標津町の市街地から弟子屈町的美留和までの壮大なコースを作り上げた、佐伯氏をはじめとするメンバーの熱い思いと行動力に頭が下がる思いでいっぱいでございます。2006年2月に、中標津に歩く道をつくる会設立とありますが、まさにこの町に歩く文化というものをゼロから作り上げ、訪れるハイカー達を自らガイドしてコースを回るなど、地道な活動が評判を呼び、テレビや雑誌での紹介をきっかけに知名度が全国的に広がり、多くのファンに愛されてきたと認識しております。

北根室ランチウェイの魅力は、豊かな自然環境を活かしたコースの魅力はもちろんのこと、エンジ色に統一された道標や小川に架けられた手作りの橋など、歩く人の心をくすぐる巧みな仕掛けにあるのではないかと感じていました。コロナが発生する前までは、北根室ランチウェイを歩くために、年間3000人ものハイカーの方々が訪れていたことは、本町の観光振興に多大な影響を与えたことは間違いございません。

しかし、北根室ランチウェイの人気の高まるにつれ課題も出てきました。歩く人のマナーや事故があった場合の責任の所在、防疫など酪農への影響でございます。平成30年

6月に町と観光協会は、北根室ランチウェイの将来的な閉鎖の可能性について連絡を受け、その後、約2年半に渡って関係者を交えて継続に向けた協議を進めてまいりました。

しかし、抜本的な解決策が見出せず、最終的には昨年10月に主催者である佐伯氏が閉鎖の決断を下されました。

新型コロナウイルス感染症の影響によって旅行や観光のニーズが大きく変化する中で、人と接する機会が少ない地方に注目が集まっていると言われております。もし、コロナ後において北根室ランチウェイが存続していたならば、大自然を満喫し心と体がリフレッシュできる体験コンテンツとして、多くの人から注目されたであろうと思います。

町としましても、北根室ランチウェイの閉鎖は非常に残念でございますが、閉鎖の判断を重く受け止め、今後は北根室ランチウェイにより育まれた歩く文化について、観光協会などとも連携しながら、何らかの形で継承できるよう継続した協議を進めてまいりたいと考えておりますので、御理解賜りますようお願い申し上げます。

【質問：松村 康弘 議員】

再質問です。18番、松村康弘でございます。

北根室ランチウェイの人気の高まるにつれ課題も出てきました。歩く人々のマナーや事故があった場合の責任の所在、防疫などの酪農への影響です。このように御答弁されています。

そして、抜本的な解決策が見出せず最終的には、昨年10月に主催者である佐伯氏が閉鎖の決断を下されました。非常に残念でございますと町長はおっしゃいました。

今日のNHKのテレビでございます。北海道がアドベンチャートラベル、これを2023年に世界大会を北海道に誘致するためのアクションを起こしている部分の特集番組をこれから1週間に渡って放映するような旨の予告番組がございました。

本日の町長の行政報告の中にも体験型観光という言葉が載っております。今、このランチウェイを復活できなければ、2022年に実績を作ることができなければ、我が中標津町は2023年、このアドベンチャートラベルにこのテーマを舞台に乗せて人々に問いかけることができなくなります。今が最後のチャンスでございます。防疫の問題、それから牧草地を通らず、耕地防風林に置き換わっていること、運営を困難とするさまざまな問題は概ね解決済みではないかと考えるのです。

町長、ここは何かお考えを佐伯さんがあきらめたからやむを得ないではなくて、町

としてもこの部分について再度検討なさる、そういうお考えはございませんでしょうか。

【答弁：町長】

再質問に御答弁申し上げます。

北根室ランチウェイ自体は観光資源の一つでありますし、復活するためにはいろんな課題があると申し上げました。この間、何もしていなかったわけではなくて、担当者関係者交えてですね、協議をいろいろさせてもらっておりましたが、なかなか結果的には調整がつかないということで。でも全てのルートが通れないわけじゃありませんので、一部通れるルートもございます。そういったルートを上手く使いながらですね、存続に向けた協議はしているところではございます。

最終的な部分につきましては、いろいろと問題があつてですね、その防疫と事故の問題、責任の問題ですね、なかなか複雑な部分がございます。簡単に解決できる部分ではないというふうには認識しておりますので、今後も、全体がどうなるのかというのは、ちょっと今の段階では答えられませんが、せっかく作った北根室ランチウェイでありますので、一部でもですね、使えるような形で調整をしていけるものだというふうには思っておりますし、西別岳ぐらいのところから向こう側につきましては、調整は既に終わっておりますので問題ないと思います。町内の一部の部分ですね、そういうところの調整に向けて、今後も努力を進めてまいりたいと思っております。

【質問：松村 康弘 議員】

町長の思いは承りました。この状況に至るまでに、事務方の皆さんが多大な苦勞をして、そして岩盤に突き当たっている。そういう部分については、理解するつもりでございます。

しかし、この問題というのは、つまるところ町民同士の相互理解とか、協力関係の醸成、感情の醸成とか、そういうところに結局負うのかなと、そんなふうにも考えますけれども、町長は5年前に町立病院の問題とだれが渦中の栗を拾うのかというところにおいて立候補を決意され、そして今日の病院経営の改革に成果を上げてこられました。町長個人の交渉力だと思います。

この町民間の感情の行き違いとか、そういうものを解決するのに、町長自身の交渉力が今問われているのではないのでしょうか。それをぜひ行使なさった上で、それで及ばな

ければ、この件については断念するしかないのかとも思うわけです。

一方で、町としては観光協会などともに、今後も歩く文化の継承について検討したいとおっしゃっています。それは、このランチウェイがもしも、今町長は、一部は必ず使えていけるし、使えるようにしていきたいとおっしゃいました。

しかし、それがいわゆる 71.4 キロの世界を実現できないとすれば、次どのようなものを具体的なイメージとして、歩く文化として、中標津町は提唱しようとしているのでしょうか。お聞かせいただきたいと思います。

【答弁：町長】

私の交渉力の問題だというお話がありましたけれども、やってしまって失敗してごめんなさいで済むものではないかなという気がいたしますので、かなり慎重に進めなくてはいけない部分だというふうには考えております。

それと、歩く文化という部分でございますけども、ランチウェイができてですね、これだけ人気が出るということは、やはり皆さんちゃんと歩いてみたいなという希望が多いということでございます。それを町のイメージとして捉えてですね、発展させていくというのは非常に本当に歩く文化だと思います。具体的にと申し上げられましたけども、調整が終わってない段階ですので、すべてうまくできないというのが現状でございます。通れる部分から通れるようにしたいなというふうに考えているところでございます。以上です。